

第 3 部

調 査 記 録

本編は素質調査を担当した調査研究部職員の現地での見聞記を集録したものである。

各人各様の卒直な感想をそのまままとめたもので、その点いさゝか断片的ではあるが、第1部、第2部に関連する個々のデータとして汲みとって頂ければ幸いである。

Y 総訓と R 総訓の素質調査で感じたこと

Y 総訓と R 総訓。この二つの総訓が私にわりあてられためざす総訓であった。

Y 総訓は Y 市にあり、Y 市は歴史的に由緒のある落ちついた街で、その地方一帯の地方行政と文教の中心地でもあった。とりたてていほどの産業もないわりに、教育はよく普及しており、県全体の高校進学率は 77% から 78% になんなんとしていた。そして、県庁のお役人、学校教師が昔ながらの威厳をいまだに失なわずにいる、そんな感じのする地方であった。調査にあたって、いろいろと配慮して下さった所長さんは、長いこと県庁や県教育庁の重要なポストを歩いてこられた方で、古武士然とした、しかし、今なお青年のような夢と情熱を持ち続けられる実に教育熱心な方であった。

R 総訓は R 市にあった。R 市も Y 市同様に古い歴史をもつ由緒ある街であった。しかし、同時にこの街は第二次世界大戦でひどい戦火に見舞われ、戦後産業都市として不死鳥のごとくよみがえった街でもあり、街全体がいかにも活気にみちていた。教育に対する熱心さは、Y 市をしのぐものがあり、高校進学率はまさに 90% になんなんとしていた。総訓の所長さんは品のよい方で、有能なスタッフにとりかこまれ、巧みにその力を組織しておられるようにおみうけした。実際の調査にあたっては、庶務部長さんと訓練部長さんとに、実にかゆいところまでよく手のとどく御協力をいたされた。それは、学校調査等においてはとても期待することのできない類のもので、職業訓練界の将来にある種の光を感じさせるに足るものであった。

それぞれの総訓で諸々のテストを中心とする調査をおえてから、これら二つの総訓に訓練生

を比較的多く送りこんでいる四つの中学校を選定し、その四つの中学校を訪れて、そこで学校長におあいし、総訓に送りこまれた生徒の学習指導要領を見せていただき、必要に応じて職業指導生事、学級担任の先生方におあいして訓練生の中学時代の実態をできるだけ具体的にとらえようと試みた。

総訓での調査結果については、第一部においてすでに明らかにされているので、ここでは専ら中学校で知りえたこと、感じたことをケーススタディー的というよりは、むしろ感想文的にまとめてみることにした。

四つの中学校のうち、Mt 中学校と S 中学校とは、Y 総訓に訓練生を送りこんでいる中学校であり、Md 中学校と A 中学校とは、R 総訓に訓練生を送りこんでいる中学校であった。

この四つの中学校を訪れて、強く感じたことの第一は、

総訓の訓練生の素質は中学校における教育（とりわけ校長先生の教育観、職業指導主事、学級担任のものの考え方）と予想以上の深いかわりをもつものらしい

ということであった。このことは筆者にとって、ちょっとした発見のように思われた。

そのことが具体的にどのようなことであったのか、それについては、以下の各学校の訪問記を読んでいただければ、おわかりいただけるものと思う。

(1) Mt 中学校において

まず訪れたのが、Y 総訓に訓練生を送りこんでいる Mt 中学校であった。Mt 中学校は広い通学区域をもつ、郡部の中学校で小学校と並んで、小高い丘が途中から広い田んぼに

なって広がっていく、ちょうどその境のところに立っていた。出迎えて下さった方は、この中学校の校長さんで、いかにも村夫子然とした方であった。校長先生は、我々を校長室に招き入れるや、いかにも通人らしい手つきで、自らお茶をたててふるまって下さった。そのあと、先生は、まってきましたとばかり、実に豊富な資料を持ち出し、とつとつと、しかし、情熱をこめて、Mt 中学校の事情について、進路指導を中心に、ことこまかに説明して下さいました。味わいのあるこの先生のお話し全体を再現する余裕のないのが残念である。

とまれ、先生の話の中から我々の調査に直接関係する部分だけを抜書きするならば、次のようなものであった。

昨年度の卒業生の進路は80%が高校進学あとの20%が就職という状態で、それは県全体の平均とほぼ同じである。

校長先生のモットーとしておられることは「学歴だけで人間のねうちがきまるわけではない」ということで先生は進路指導にあたっては個々の生徒の個性、能力の方向及び彼等の意志を何よりも尊重するようにしたいと言っておられた。先生自ら、170名余りの三年生全員1人1人と卒業するまでに面接できるように心がけておられるということであった。

このような先生の進路指導にあたっての態度には、明らかに、いかにも、この県らしい高校進学に際しての「普・工・商・家・農(以上公立)・以下私立」といった一般的傾向としてのランキングにあえて抵抗しているという厳しい姿勢が読みとれた。

このような校長先生の教育観を反映してか、とりわけ校長先生をはじめ諸先生方が職業訓

練にくわしく、生徒にそちらに進むようにすすめているわけではないということであったが、この中学校からは7名という多くの生徒がY総訓に送りこまれていた。(このように多数の生徒を総訓に送りこんでいる中学校はY県、R県全体で、この学校たゞ一校であり、他はたいてい1・2名にすぎなかった。)

ところで、このような校長先生の率いる学校から、Y総訓に送りこまれた生徒達というのは、一体どのような生徒達であったのだろうか?

Mt 中学校の学習指導要録は次のように教えてくれた。

まず7名の生徒の知能の程度であるが、それは知能偏差値にして、32、43、44、46、60、62、66となっており、明らかに精神薄弱とみなされるものから、明らかに上知とみなされるものまで、実に様々な能力程度のものが含まれていた。最高の66というF君の知能程度は、当然のことながら、

男子クラスメート22名中の第二位を占める

高いもので、62のN君の知能程度は第4位にランクされるものであった。

この事例からも、総訓生の素質は劣るといった一束ひとからげのとらえかたが、いかに危険なものであるかがよくわかる。

しかし、学業成績の方は、あまりふるわない。F君の場合、国語、数学、理科、技術家庭科が全部3で、かろうじてまん中程度にいる以外、概して、2程度で下位グループに属し、N君の場合など、その高い知能レベルにもかかわらず

ず、学業成績の方は2, 2, 1, 2といった調子で低迷していた。

行動及び性格の欄に目を移すとずらりとBが並んでおり、目だたぬ存在の中学生達であったことが一目でわかった。

更に家庭の状況の欄には、F君、N君の場合を含めて、準生活保護家庭の子供であるとか、父親が別居しているとか、父親が亡くなり母親のみの手で育てられたといった子供が多く、

総訓生は素質そのものが劣るというよりは経済状況をも含めて、家庭に問題があり、中学時代に持てる能力を十分に発揮しえず、消極的になってしまったものが非常に多い

ことが予想された。

校長さんのいう「生徒の能力の量よりも方向」「生徒自身の意志と選択権」を尊重するという方針が、様々な能力の程度のもを総訓に送りこむ結果をもたらしたのでは？と思われる反面、それにもまして、進学率が75%にもなろうとしている現在、いまなお、中学生の進路決定に大きな重圧を加えている家庭の経済状況の重みに改めて、胸をしめつけられる思いであった。

(2) S中学校において

次に訪問したのは、S中学校であった。S中学校は、市内の有名校で県教委より「進路指導研究推進校」として指定されている中学校であった。校長さんは、Mt中学校の校長さんの場合と同様、進路指導には極めて熱心な方であった。しかし、S中学校の校長さんは、Mt中学校の校長さんとは全く対照的な性格と考え方をもっておられる方で、いかにも「やり手」という感じの方であった。進路指導に関して、先生

の頭の中には一つの明確な尺度が出来あがっており、その尺度に従って進路指導がなされている。そんな感じのお方であった。

校長さんは、能力ある中学生の多くが公立高校の普通科にあこがれていることは動かし難い事実であり、そこに高い能力のものが多く集まる。従って、そこには優秀なものしか入れないと割りきって考えており、ついで公立の工業、商業、家庭、農業の順に各職業高校がランクづけられていて、ここ二・三年の間に次第に人気の落ちてきている高専や商船高校にも上から1/5以内の成績であれば、まず間違いなく入れるといったことを教えて下さった。そして県内の高校の公・私立の割合は、7:3の割合であり、私立の高校へ進学すれば、国立大学へ進むことは、非常にむづかしくなるだろうといったことを、こまかな数字をあげながら説明して下さるのであった。

この校長さんの何よりの御自慢は、直接職場に送りこまれ、いかなる組織的な教育的配慮の下にもおかれることのない、いわゆる純就職者が今年度から、ついに1名もなくなるはずだということであった。昨年度は、男子4名(そのうち2名が総訓へ入っている)、女子4名の計8名だけが就職したが、そのうち男子2名が定時制高校に進学しており、女子もたゞ1名を除けば何らかのフォーマルな教育を受けていることになっていた。先生にとって、S中学校が育児院関係の子供達を引き受けているため、毎年200名ばかりの卒業生中10名内外の就職者がかならず出ることになっていることがいかにも残念なことのようであった。この中学校の校長さんの進路指導の目標は、どうやら卒業生全員を高校に進学させることにあるように思われた。

この校長さんと話し合ううち

- 高等学校普通科を卒業後、大学進学をあきらめ何らの職業的教育訓練を受けることなく就職しなければならないものが普通科卒業生の実に40.8%にも達しており、更にそのうち事務系の職にもつげず、意に反して、いわゆるブルーカラーとならざるをえないものが男子のみにかぎってみるならば彼等就職者のうちの約半数にも達していること。
- そのようにして就職したものの多くが職場に不満をもっており、約半数のものが職をすぐにも変えたいと願っていること。
- 更に彼等のうち、一度ついた職をやめてしまい改めて職業的技術を身につけようと職業訓練所、各種学校に改めて入りなおすものが、最近、ふえる傾向にあり、事実R市の県立の職業訓練所では訓練生の約半数がそうした高卒者によって占められてきていること。

といった諸々の事実をこの校長さんはどう理解しておられるのだろうか？という疑問がふと頭をかすめた。

この疑問に対する解答は校長さん御自身の口からきかすことはできなかった。しかし、ある先生からは次のような話も聞くことができた。

つまり、その先生は、ある子供が普通学校を出て、大学受験に失敗し、工場で働かなければならなくなり、そこではじめて職業訓練の必要性を感じ、改めて訓練所の門をたたくものかいたとして、それでよいのではなからうか。否、そのような自分の進路の見出し方こそ、ほんとうの進路の発見のしかたなのではあるまいかといっておられた。

そうした考え方も勿論ありうるだろうとは思いつつ、これまで約10年間のあいだにいくつかの普通高校と職業高校とで教鞭をとった経

験があり、かねてより高校教育のあり方について疑問を持っていた者にとって、何か釈然としないものがあり、中学校の先生方にも、高等学校の教育が最近、急速にどのように変わりつつあるのかその実情をもっとよく知っていたらいいと思った次第である。

ところで、このS中学校から総訓に送りこまれた中学生とは一体どのような中学生であったのだろうか？この中学校から総訓へ行った生徒は、S君とB君であったが、S君の知能の程度は偏差値51で、まあまあ能力の持主であり、B君の方は、41で下位グループに入っていた。

S君の学業成績は、国語が1であるほかは、数学・理科・技術家庭科が3であり、行動及び性格については、協調性がA、向上心と根気がCであるほかは全部Bということであり、家庭の状況は母子寮にあり、経済的に苦しく、4人家族で準生活保護家庭の子供であった。

B君の方は学業成績は国語・数学・理科・技術家庭科がすべて1であり、行動と性格の記録は、公共心がA、根気、指導性、積極性がCである以外は、全部B、家庭の状況は、やはり準生活保護家庭の子供で、S君と非常に似たような境遇の生徒であった。

どうやら、S中では

総訓とは準生活保護家庭程度の貧しい子弟がやむをえず行くところ

ととらえられているように思われてならなかった。

(3) A中学校において

次に訪れたのは、R総訓に生徒を送りこんで

いるA中学校であった。

A中学校は、R市からさほど速くない半商半農といった感じの地域にある中学校で、訪問してまっさきに感じたことは、生徒を大事にしている学校らしいということであった。生徒達の勉強している新校舎は鉄筋三階の堂々とした立派なものであった。しかし、先生方のおられる職員室の方はその裏の方にあるみすぼらしい木造の建物にあり、校長室はその一隅をすまそうに借りているという感じのするところであった。どこの学校の校長室にも置いてある校旗、優勝カップといった学校の伝統や優秀さを誇示する一切のけげばかしいものがそこにはなかった。

にこやかにわれわれを招き入れて下さった校長さんは「人のよさが何よりのとりえ」といった感じのする方であった。こちらの意地の悪い質問に、時々皮肉をまじえながら、しかし適確に要領よく答えて下さったのは、旧制の高等工業を卒業され、その後長いこと企業にもつとめたことのあるRという中年の職業指導主事の先生であった。

先生は、御自分のお作りになったらしいぶあつな「就職状況報告」というパンフレットを手渡してくれ、それに従って、最近5・6年のうちに就職希望者の数が著しく減ってきていること。そして40年頃までは、それでも30名以上あった就職希望者が、今年はずいに20名台を割り、287名の卒業予定者のうち、わずかに17名のみが就職を希望しているにすぎなくなっていること。しかし、1つには地域の諸々の特殊な事情と、いま1つは大工、左官等の建築関係の技能職の経済的な条件が目に見えて良くなってきつつあることなどから、これからも就職するものが全くなってしまうことは、

まずないであろうということ。A中学校のある地域では、かつて最も成績が良いとされていたものが工業高校を目指していたが、最近では、やはり、他の地域同様、普通科が、生徒達の人気的となっていること等について、具体的に数字をあげながら、こまかに説明して下さった。

先生は、又「中学卒業程度で自分の進路を決定できるものは極まれであり、自分の進路をきめる時期は、一般的にいて高等学校卒業後が適当である」というスーパーバリーの考え方を堅持しておられ、このことは能力の特に劣る者にこそ適用されるべき原則であるという考えを持っておられた。つまり発達がおくれ、能力の劣ると思われるものこそ、今や一種の温床的役割をも果している普通高校に進学させるべきであり、たとえ彼がさしたることを教室内で学びえないで、そこにたゞ座っているだけであったにしても彼のいわゆる成熟を待つという意味においてもそれは、彼にとってけっしてマイナスなことではないはずだといわれるのであった。というのは、職業教育とか職業訓練とかいうものは、実に厳しい側面をもつものなのであり、十分な発達を遂げたものにとってのみはじめて、行なわれるべき性質のもので、それを知能の劣るいわゆるlate developerに課すべきではないというのである。こうした能力の開発のおくれているものに職業教育訓練を課すということはどだい、残酷物語以外の何物でもなく、実は彼等にこそ普通科の教育が与えられ、彼等の能力の開花がしんぼう強く待たれるべきだと主張されるのであった。

教育学徒のはしくれとして、先生のいわれることは身につまされてよくわかった。久々にいかにも教育者らしい発想の先生にお会い出来たことに限りない喜びを感じつつも、筆者の先生

に対する考え方に全く同調してしまうわけには
いかない立場が、意地の悪い質問となり、つい
には皮肉の応酬と相なった次第であった。

ところで、このような考え方をする先生を中
心として、進路指導が行なわれている A 中学校
からは、どのようなタイプの中学生が総訓を選
んでいたのでしょうか？ A 中学校からは、U
君と T 君の 2 名が、R 総訓に入っている彼等の
知能の程度はそれぞれ偏差値にして、46 と 63
であった。

まず T 君の場合から学習指導要録の記録をよ
りくわしくたどっていくと、彼の知能のレベル
は男子クラスメート 24 名中上から 7 番目とい
うことになり、上の部に属していることが明ら
かである。しかし、彼の学業成績は知能の高さ
にくらべ全くといってよいほど振わず、国語、
数学、理科、技術家庭科すべて 2 となっていた。
目につかぬ生徒であったらしく、行動及び性格
の欄はすべて B でうめられており、担任の所見
のところには「おとなしいが自主性、積極性に
欠ける」と記録されていた。学級担任に会って
家庭の様子をきいてみると、T 君の父親は、九
州の炭坑離職者であり、生活が苦しく、夫婦共
働きであったが、その上昨年母親が工場でけが
をするという不慮の災害に見舞われたという実
に気の毒な生徒であった。しかし、そのような
苦しい中にあってもなお両親は T 君に高校進学
をすすめていたが、兄も中学校卒業後すぐ就職
していたこともあり、T 君は、早くから就職す
ることに決めていたというのである。しかし、
兄は高校へ進学しなかったことを悔いており、
弟には是が非でも高校へ行くようすすめていた
というのである。結局、両親と兄の願い、それ
に本人の希望とを折半して、総訓へ行くことに
したというのである。具体的に総訓が彼の進路

の候補の 1 つとしてあがってきたのは、たまた
ま父親が総訓について聞き知っていたためとい
うことであった。

次に、U 君の場合ではあるが、U 君の場合は、
その知能程度は男子クラスメート 25 名中下か
ら 3 番目となっていた。学業成績は国語、数学、
理科、技術家庭科がすべて T 君同様で、彼の知
能レベルからみてまあまあというものであった。
行動及び性格の欄には積極性が A である以外は
全部 B となっており、まじめでおとなしい性格
の子供であったことがよくわかる。担任の話で
は、高校進学は不可能な子供ではなかったが、
彼の希望する公立の工業高校には能力的に問題
があり、といって私立の工業高校へ進学するほ
どの経済的なゆとりが家にはないところから、
担任が総訓へ行くことをすすめ、そうすること
にしたということであった。しかし、担任が総
訓の実情をよく知っていたかということ、そうで
もなさそうであった。

この学校で感じたことは、一般的にいて、
進路指導は望ましい形で行なわれており、その
ためのチーム・ワークも非常にスムーズにいっ
ていたように感じられた。しかし、意外だった
のは

こと職業訓練の実態とか制度といったこと
になると、職業指導にかなりの熱を入れて
おられる先生方でさえ、ほとんど御存知な
方が多く、PR の必要を痛切に感じさせ
られたこと

である。

同行して下さった、R 総訓の訓練課長さんが、
R 総訓を修了した者は市内の業者とのとりきめ
で、中卒後二年の訓練を受けた者は、高卒者と、

高卒後二年の訓練を受けた者は短大卒とそれぞれ同じ条件で採用されることになっているといったお話をされた時、先生方は身をのりだして聞き入っておられ、そのような情報は是非とも中学校の方にもどんどん流してほしいと声をそろえていっておられた。又職業訓練制度の袋小路的の性格をおそれおられた先生に、職業訓練大学校についてお話ししたところ、あの職業指導主事の先生が、一瞬真面になって「そんな大学があるのですか？ 私自身が入って再教育を受ける必要のありそうな大学だ。どこかスポンサーになって内留させてくれるところはないかなあ」といっておられたことが実に印象的であった。結局職業訓練大学校について知っている中学校の先生には、1人もお会いできず、どこでも常に、職業訓練のPR不足を感じさせられたが、この時ほどその必要を強く感じたことはなかった。又中学校の先生方を説きふせるためには、職業訓練制度をどこまでも開放的に整える必要のあることも改めて痛感した。というのは中学校の先生方は、自らの教え子達が夢のない袋小路的な制度にとじこめられることに、強い生理的ともいえる嫌悪感を持っておられるようであったから、そして中学校の先生方の理解を得、先生方の支援を得ることなしに、中卒訓練を今後も続けていくことは全く不可能にちかいこと。そして中学校の先生方の支援を得るためには制度をあくまで「青天井」にして開いておかなければならないことをも痛感させられた。

(4) Md 中学校において

最後に訪れた中学校が、R市内のMd中学校であった。Md中学校では、校長さんが不在であったので、教頭さんがお世話して下さいました。しかし、この4月に新しく赴任してこられた

教頭さんにとって、昨年度の進路指導の実情についてお話ししていたゞくことは無理なことで、教頭さんは職業指導主事や進路指導の主任の先生を教務室からさかんに電話で連絡をとっておられたが、結局どちらも不在とわかった。(この学校には、日本の学校ならかならずあるはずの職員室というものがなく、先生方は、各教科を中心に設けられているいくつかの研究室なるところに分散しておられるということであった。)学級担任の先生方が最後のたのみとなったが、これまたつかまえるのに一苦勞。この時ほどずっと調査につきっきりでお手伝い下さったR総訓の訓練課長さんの御厚意が有難く思われたことはなかった。

学校中を駆けまわってやっとIという美術の先生とItという国語の先生をつかまえることができた。このお二人が昨年この中学校からR総訓へ入った二人の中学生の学級担任であった。このお二人の先生からは実に多くのことを教えられた。しかし、お二人の先生のお話をお伝える前にMd中学校の概況について、やはりお話ししなければなるまい。筆者が担任の先生方をたずねてうろろうしているうちに、訓練課長さんが御親切にも整えて下さった資料によるならば、Md中学校も、ご多聞にもれず、ここ5・6年間、進学率は確実に90%をこえている。しかし、Md中学校は生徒数1,500名をこえる大規模中学校でもあり、毎年50名近くのものが就職を希望しており、その就職先は金属加工、金属材料製造業が多く、次いで電気、裁断・縫製、製糸・紡織、飲食関係、生産工程の順となっている。

このような中学校から、R総訓に入った二名の中学生というのはMs君とMe君であったが、Ms君の知能レベルは知能偏差値が65で男子

クラスメート24名中上から数えて4番目で学業成績も、国語、数学、理科、技術家庭科が全て4であり、相応の成績をおさめていたといえる。行動・性格の記録はすべてBで担任所見には「内向的」と記録されていた。

美術の教師をつとめる担任は彼のことを実によく記憶しており、Ms君は、芸能科系統が弱いので、公立の普通高校を受験するには、ややむりのように思われた。しかし、高専をも含め、職業高校ならどここの学校へも楽に合格する能力の持主であったといっておられた。しかし、父親はすでに亡く、祖母、高校の炊事婦をしている母親、それに工員をして働きながら県立の定時制の工業高校に通っている兄、それに中学1年の妹5人家族で、家計は母と兄の働きで支えられており、そうした家庭の事情もあって、総訓を選ぶことになったというのである。又本人は将来大学にまで進むつもりでおり、総訓へ通うかたわら、市立の定時制の工業高校へも通っており、その定時制高校では級長さえつとめているということであった。担任は、彼について実にこまかいところまでよく観察しており、卒業後も彼の将来をいろいろと案じているようであった。しかし、問題は彼が総訓を選んだのは県立の工業高校へ通う兄からの助言と、友人から得た総訓に関する情報によってであり、担任の助言によるものではないということであった。担任はすでに総訓についての若干の情報は知っていたが、それはMs君が総訓へ入ったことによってであった。この担任は、筆者に職業訓練にかんして様々な質問をしたあと「どうも聞いていると総訓は一種の工業高校とほとんど変わらないところのようですが、どうして産業高校とでも名づけないのですか？ 職業訓練所といっているうちはそれにふさわしい能力をもつ

中学生達の関心さえひくことはできないように思われるのですが？」といった質問をされるのでした。そして、もし名称が産業高校とでもなっているならば、さほど無理なPRなどしなくとも現在の職業訓練所を進学指導体制のなかに加えて、それにふさわしい進路指導ができるのではなかろうかと御親切にも職業訓練界全体へのアドバイスをしてくれるのでした。「今や訓練生集めが、総訓にとっての最大の課題となりつつある」といっておられた。R総訓の訓練課長さんも、この美術の先生のアドバイスには大きく首をたてにふって何度もうなづかれるのでした。

次に、この中学校からR総訓に進んだMe君の場合についてみよう。Me君は、知能の程度が43で24名のクラスメートの中で、テール・エンドを記録しており、学業成績は国語、数学が1、理科、技術家庭科が2で、最低の部類に属していた。しかし、彼のような場合でも、担任に会って話してみると、能力的に高校へ行けなかったから総訓へ行ったわけではけっしてないということであった。事実、彼はある電気関係の工業高校に合格しており、かねてからやがては機械関係に進みたがっていた彼は、はりきってその高校に進学するつもりでいたそうである。しかし、入学通知がきてから、母親が学校へきて泣きながら担任に進学をあきらめさせるように話してきかせてくれといってきたというのである。というのは、Me君の家は公立の高校ならいざしらず、私立の学校へ入れるだけの経済力はなく、親の方からの願いもあって、職業訓練所の受験をすすめたともいっておられた。ここでも筆者は中学生の進路決定が経済的要因に左右されていることを改めて思い知らされたのである。

しかし、この学校で感じた最大のことは

総訓に適性能力のある訓練生が入ってくるか否かは、中学校の進路指導のあり方にすくなく影響されることであり、その進路指導をスムーズに行なわせるためには、総訓に進むものを就職希望者としてでなく進学指導の一つとしてとりあつかうのが適当であり、そのためには名称の変更がどうしても必要なのではなからうか？

ということであった。

最後に調査全体を通じて感じたことは

何事も調べてみなければわからない

ということであった。というのは、この調査をはじめの前に、研究員仲間の間でも、この調査の意味について、いろいろと問題がなかったわけではなかったからである。その最たるものはいまさら総訓生の素質など調べてみなくともすでにわかっていることではないかという意見であった。事実、昭和39年に文部省から出された「後期中等教育機関利用状況調査報告書」等の資料から割りだすならば、職業訓練所の訓練生は、概していえば素質面において一般水準より劣り、家庭に問題があり、貧しい家庭の出身者が多いといえることができる。しかし総訓生の素質の分散度がどの程度で、個々の訓練生の問題がどのような性格のものであるのか、全く不明のままであった。今回の調査によって、素質の分散が予想以上に大きいもので、かなり能力の高いものが意外に多いことが、予想されるとともに、個々の訓練生の問題も明らかにすることができ、更に中学校の進路指導のあり方が、

総訓生の素質と深いかかわりをもつものらしいと考えられることなどが今回の調査によってかなりはっきりしてきたように思われる。とくに能力の分散度が予想以上に大きいところから、総訓生を進学体制の落伍者としてとらえ、そのことからすぐさま総訓生の素質が劣るときめつけてかかることが、いかに危険であるかが改めて痛感させられた。その意味においても改めて「やはり調べてみなければわからない」としみじみと感じた次第である。

今回の調査から得たものが今後の調査研究、とりわけ「プログラム学習」の研究等を進めるにあたって十二分に活用されることを念じつつこの印象記をおえることにする。

K 総訓を訪ねて

K 総訓は高松市の東、駅より車でほぼ 20 分程のところにあった。

このあたりは市の中心街よりやゝ北にはずれ、近くには、松平侯の庭園、栗林公園があり、高松工業試験所が所に隣接していた。

また、ここからは、名勝・屋島の台地が近くに望まれ、落ち着いた環境の中にあった。

総訓の建物は鉄筋二階建てであったが、さして大きい方でなく、他の総訓と外見上は少しも変らなかつた。しかし、間もなく此処が、全国総訓中、尤も歴史が古いのだと聞かされた。

さして広くもない運動場とほぼ同じ位の面積で実習場が四棟、運動場の片隅を占領していた。

出迎えに見えた訓練課長さんの応待で、所長室に入ると、生憎所長さんは、所用で御出張中であつた。

やおら、庶務課長さんも見え、お世話になる先生方が順に紹介された。

その中の一人、古参の先生は、総訓の生き字引と云われているようで、まだ就任、日も浅い訓練課長さんのよき相談相手と紹介された。

そういえば、ここの職員にはかなり年輩者が目についたが、その殆んどは、開所以来、ずうっとここに奉職して、20年、30年の経験をもった人が多いということだつた。

ここを訪れて、先づ目についたのは、総訓生の行儀のよいことだつた。廊下などで出合うたびに、どの生徒もおじぎをして通るので驚いたのであるが、これについては訓練課長さんの説明で納得出来た。

というのは、私がここについた日の朝、朝礼の訓辞の中で、課長さんが、私共調査の意義を高く買って大そうぶつたそうである。

いふなれば、全国あま多の総訓の中でとり分けこが選ばれたのは、私共の総訓を訓大が高く評価したのであるから、諸君は期待に応じてくれということのようである。

ともかく、ここの生徒が行儀のよいことと、素直であることは、課長就任以来の実感であると共に課長さんの日頃の自慢であるらしい。

というのは、課長さんはここへ来る以前、G 総訓におられたそうだが、そこでの生徒の質と余りに相異していたので、つくづくこの総訓に惚れてしまったそうである。

事実、私がここでテストを行なっている際、生徒は丁度実習時間に当たっていた様子で、一人の生徒の手が余りに汚ないので、手を洗うよう云ったところ、控えていた全員が自分から手を洗いに行ったことで、生徒の素直さがそのまゝの形でうけとれたのであつた。

さらに気のついたことは、先生方が課長にかなり協力的であつたことだ。

今度のテストには、かなり注文をつけたのであるが、先生方は自分の持時間をやりくりして終始こちらの計画に積極的に参画して下さつた。

ともかく先生方の熱心さについては、まだいろいろ感ずるところがあつた。

これはテスト中の出来事であつたが、若い先生が古参の先生にテストのやり方について、いろいろ意見をつけて議論をしている風景を見受けたのである。ともかく、いいなりにやるというのでなく、自分で納得のいくまで喰ひ下っているようであつた。

また、もう一人のこれも若い機械科の先生が、私のところへ、ここの生徒の反応をどう感じたかということ聞きに来られた。うちの総訓生が他の総訓と比べて、落ちるのではないかということをしきりに気にしているのだつた。

その先生によれば、年々生徒の質が低下しているのではどうか困っているというのである。

しかし、これは私にとって少々意外なことだった。

というのは、授業参観や実習風景を通して感じた限りでは、生徒は真剣にとり組んでいたからである。つまりやる気があるとみてとったからである。

とすれば、その先生は余りに意欲的な余り、生徒を見る目に少しもの足りなくうつったのかも知れない。

次に実習見学から感じたここでの特色を上げれば、実習内容がかなり、応用的であり、その殆んどが受託によるものであった。

これは、どの科を通じても共通とみられ、例えば溶接科などは、実習場一ぱいに骨材を組み上げた鉄骨の屋形がおかれていた。また板金科では、大きな製缶を溶接していたが、担当の指導員は殆んど手放しで生徒にまかせている風であった。これについては、初めからそのように課題を組んでいるので、このようなものでも手がけられるのだと語っていた。聞けば、この辺りの工場は中小規模が多く、それに人手不足も重って、訓練所に依存する度合いが高いということであった。

面白いことに、ここは、また事務科がおかれ県訓の委託による女子実習生が教習をうけていた。聞けば、現職の女子事務員ばかりということだが、教室は県訓の建物を借り、講師は、うちの先生であるといっていた。どの子も美人であるのに、一寸驚いたが、課長さんいわく、それは私の目が高いからだと言ったようである。

A 中学を訪ねて

近在の中学をとということで、2校選定してもらったが、そこからは6名が半々に出身していた。初めに訪ねたA中学は所から東北へおよそ30分程のところであった。

そこは古ぼけた木造校舎のそれも小さな分教場を思わせる中学であった。

生活指導担当のその教師は私達を校長室へ招いた。趣旨を告げると、快よく指導要録を見せてくれた。学年はたったの3学級しかなく、3名は2組に分かれていた。当の教師は記録の合い間にも時々顔を見せたが、あとで話を聞くことにした。

この中学の出身者は県内の14の高校に進んでいるが、このうち有名校は2校ほどで、そこへ進んだ者は80名中11名であった。

さすが有名校へ進んだものは、成績もよく、IQ値もそれを裏付けるように高くなっているが、かといってIQの高い者、必ずしも成績がよいと云えないことが指導要録は物語っていた。

しかしながらIQ値が特に低い者は明らかに成績も悪く、その多くは就職組か県訓組、さらには数少ない女子私立高か、一部の公立高にみられた。

当の教師に高校をランクしてもらおうと成績が普通程度なら上位から数えて7校位まで、それ以下は程度が落ちるということだった。

それによると総訓入所組は普通高の7位くらいに落ち着くのではないかとということだった。

総訓入所者は、おしなべて成績はせいぜい中程度、決してよくはないが、IQは左程低いことに注目すべきものがあると感ずるのである。

特記すべきは性格の面で、やたらと温順、明

朗、熱心、誠実が目につくのであるが、このような性格面が成績とどう結びつくのだろうか。

わからないまゝに、そのまゝ受けとってしまった。

B 中学を訪ねて

B 中学は A 中学からさらに東へ一時間程のところにあった。この辺りは観光地、屋島を後に控え、先の中学とは比べものにならない近代的な校舎であった。

程なく現われた教師は学級担任の一人であった。校長室へ通されたが、そこで先づ目についたのが、立派な机と壁一面に貼られた表賞状、それに優勝旗とカップのいくつかだった。

これらがさんぜんとその学校の威容を誇っているかのようであった。

学級も 11 学級もあり、先の 3 名は 2 組に分れていた。

ここでの印象は全体に先の B 中学より質が良いらしい事である。このことは、2 学級 80 名中 19 名までが有名校に進んでいることから読みとれる。

また、先生の評価が、先の中学に比べて綿密であることが性行記録の細分の程度より、うかがわれた。

入所後の成績・追跡調査を行なって

前記 6 名について、総訓入所後の成績がどのようになったが、気になったので再び総訓に戻って見た。

総訓の指導要録より、6 名分を抜すいて、中卒時の成績と比較してみた。

<H 君について> — A 中学—

H 君は溶接科に属している。中卒時の成績は理、数科とも②であったが入所後はいずれ

も 50 点代に入り、若干よくなっている。

また「技術家庭」は②であったのに対し、専門の溶接法では、ガス・電気ともいずれも上位点をとっている。

従順、真面目な態度は、ここでも現われており、なしとげる性格を強くもっている。

<I 君について> — A 中学—

I 君は塗装科に所属している。中卒時の成績は、理、数とも②であったが、入所後は物理 78 点、化学 88 点といずれも向上した。

専門の塗装法(1)(2)はそれぞれ 70 点代を取得している。特に実技面では 80 点代をとりかなり向上している。

<J 君について> — A 中学—

同じ塗装科の J 君は中卒時、理、数科はともに③であった。入所後は物理 73、化学 64 と向上のあとはみられない。専門の塗装法についても横すべり気味であり、意慾の面で欠けているように見える。

<K 君について> — B 中学—

自動車整備に所属している。理、数科はいずれも③である。入所後は数学 92、物理 82 とかなり上位点である。

専門科目は 80 点代を取得し、成績優秀である。

実技にかけては、すべて 90 点代を取得し、抜群の成績である。性行欄はすべて④以上をとり、申し分ない性格の持ち主とみられる。

<L 君について> — B 中学—

溶接科に所属、数学②、理科は③であった。入所後は数学 85 点、物理 70 点をとり、いく分向上している。専門の溶接法は、ガス、電気とも 90 点代を取得、実技もまたしかりである。

中卒時の「技術家庭」④からおして、彼には

技術的素質が多分にあるとみられる。

性行面では、真面目、熱心な性格が中卒時から引継がれている。

<家庭環境について>

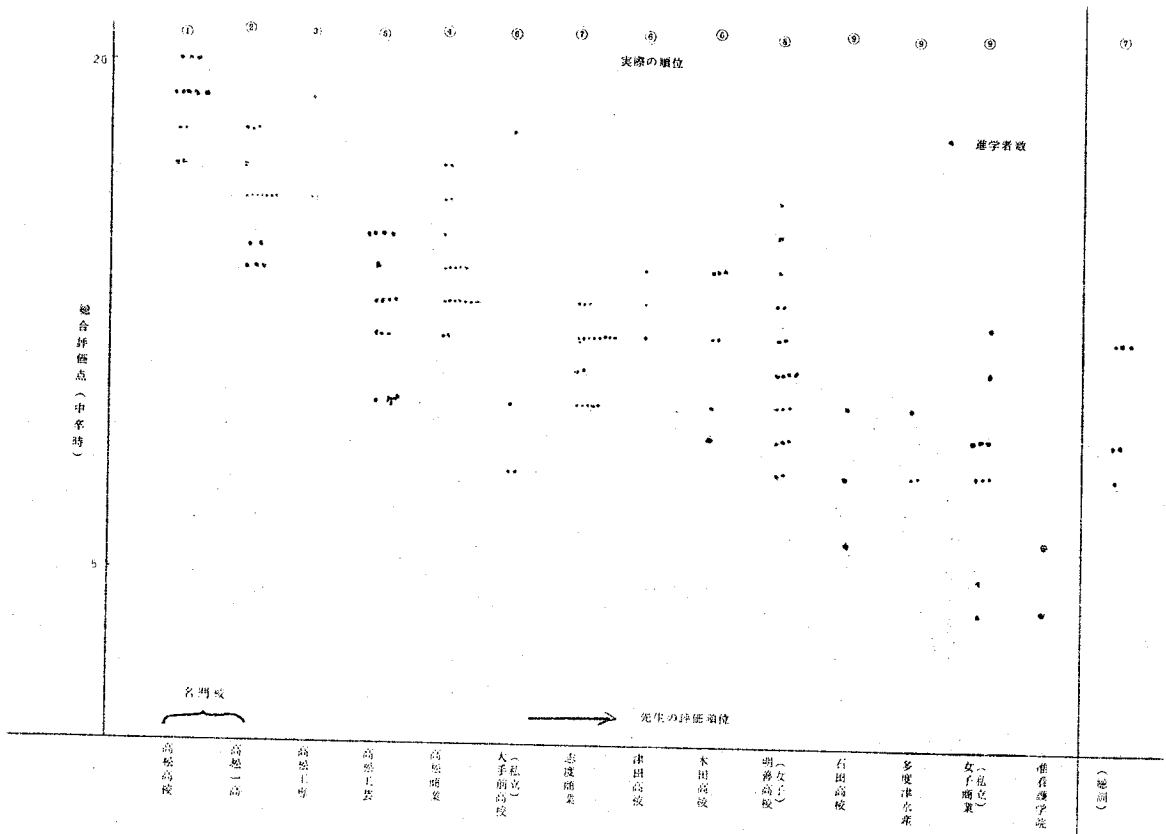
いずれも農業を家業として、兄弟も一応まともなところに就職し、ごく普通の家庭と受けとれる。

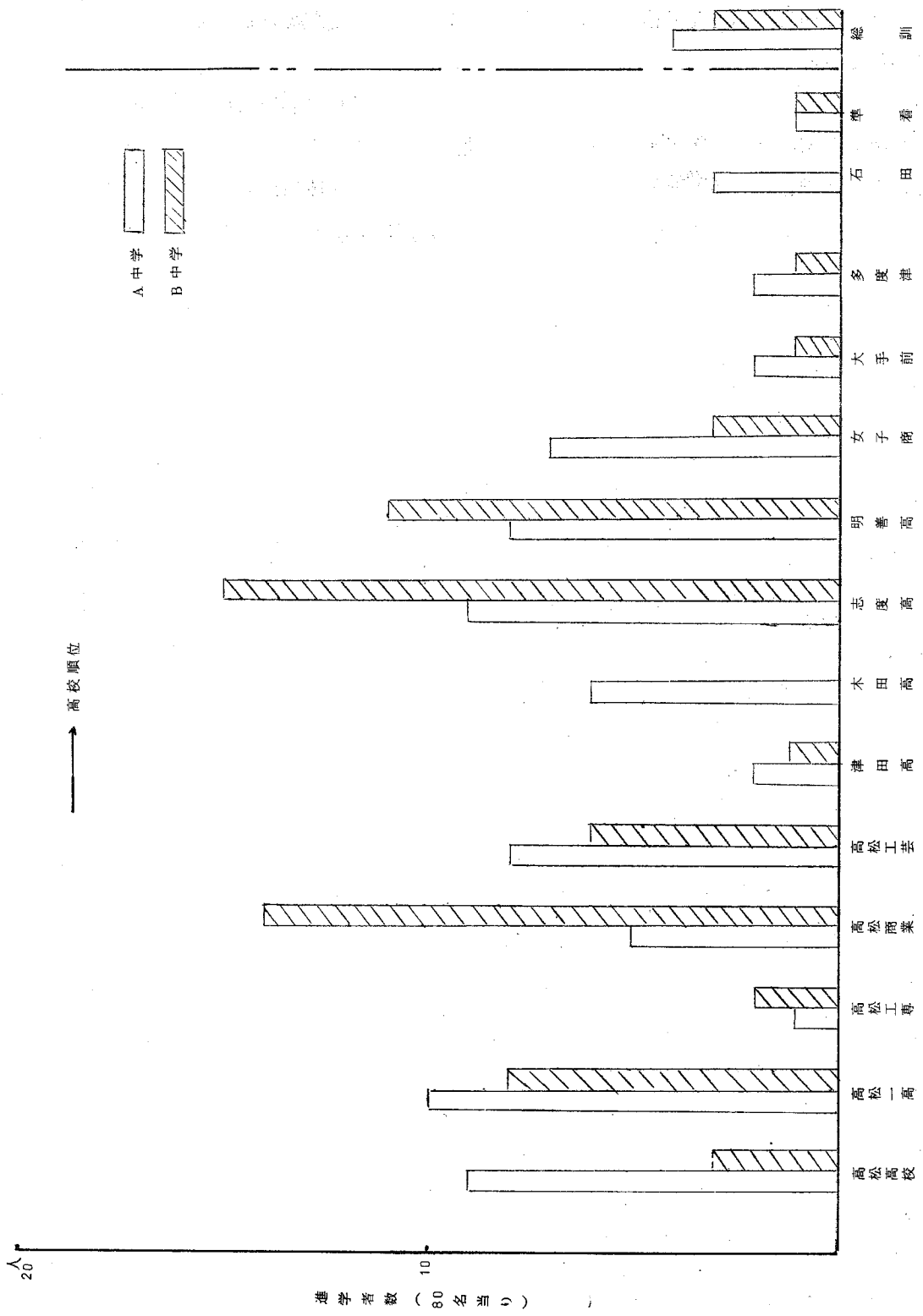
<総 評>

全般的にみて、総訓入所後に成績は向上している。

共通して真面目、熱心であり、やりとげる性格をもっている。

この面から、彼等6君はいずれも入所後、よく適応しているといえる。





素質調査に関連して

先行研究のために

調査研究部ゼミでの席上、研究部長から、素質調査に関連する先行研究を行なうべきことを指示された。

私は早速、K研究員ともども国立教育研究所及び能力開発研究所を訪れた。国立教育研究所ではM室長他3人の研究員から、また能力開発研究所ではH部長からそれぞれ貴重なご意見を頂くことが出来た。

この両研究所での問題点となったのは、やはり「素質の定義」づけに関してであった。

即ち、素質をどのような枠で考えるかによって方法が決まって来る。

この点に関しては、既にわれわれ調査研究部員と訓練部指導科の職員とで構成している職業訓練ゼミでも数回に互って討論を重ねたことでもあった。

とも角、素質に関する現行の各種検査をよりどころとするとして、更に職業訓練の場に必要な能力判定方法を将来新たに研究すべきものというのが両研究所の見解であった。

因みに、能力開発研究所においても、新たに「職業能力テスト」を開発中で、その標準化作業に入っていた。そして、われわれに対して、同テスト用紙の提供方までご提案を頂いたのである。

然しながら、テスト方法研究は勿論大切ではあるが、今のわれわれにとっては、何よりも先に、まず総訓生の素質の現状を客観的に把握することが先決であった。

T総訓のこと

その1)

山陰線T駅から徒歩約15分と地の利を得たT総訓は、昭和35年に開所、現在では機械、仕上、電子等の基幹的職種を含む6職種について専門訓練が行なわれている。

43年度は224名の応募者があって155名が入所した。

K所長、W訓練課長のお話によれば「うちには中学校自体でかなり選ばれた者が入っている」とのこと。

元来、当県は高校進学率高く、県外就職率も又高い県であって、正直のところ私は、この言葉に半信半疑だった。

しかし、日ならずして私は、中学校の先生の説明やら、中学校でのケーススタディから、それが必ずしも誇張でなかったことを知るのである。

その2)

明日からの素質調査実施に備えて打合せの最中、もう午後4時を廻っていた頃だったろうか、W訓練課長さんが、「これからシウレイがあるので一寸失礼します。」と行って出て行かれた。

ふと見ると、前庭に全訓練生が整列し、最前列の周番生徒が〇名異状ありませんとそれぞれ科別に先生に報告する声が聞えた。

シウレイは終礼であったのである。放課に際しての節度ある訓練生達の態度に私は心から好感を抱き、且つ身のひきしまる思いがした。

私は、これまで朝礼は各所でみているが、終礼を見たのはこれが始めてであった。

その3)

木工科のT先生は小肥りで40がらみの落ち着いた感じの指導員である。

先生はこう云われた「私ども現場では、こと訓練に関するデータは、とろうと思えば、いくらでもとれます。しかし、これをまとめる為には、時間と知識とが要ります。私はその知識について、訓大卒業のI指導員に教えて貰っています。これをみて下さい。」

拝見した資料は入所時の適職性能と試験成績から現在までの実技、学科成績進度について、月々個人別に刻明に記されたグラフであった。T先生はその中から、各人を見極めた効果的訓練推進策を得ようとしているのであった。

T先生のような教育熱心な方は全国には多くおられることだろう。

W訓練課長の肝いりでもたれたT総訓での勉強会の席上、T先生その他熱心に意見を述べられた先生方の顔が浮んで来る。T先生には「技能と技術」誌への投稿をおすすめしたので、何時か見て頂けることと思う。

その4) 能力開発訓練

素質調査のための連日のテストを了えてほっとした私は、T総訓K所長にあいさつに伺候した。

以下はその時、K所長から伺ったものである。

「日本の公共訓練では、入所時に各人毎の訓練職種を決定するのが通例である。

しかし、訓練効果の点からは、能力なり適性なりが十分把握された後に職種を決めることが良いのではないだろうか。

例えば、西ドイツのクルップ社では、まず

各職種に共通な基礎及び専門訓練を行ない、その間(約8カ月)に、一般能力と職業適性を具体的且つ詳細に評価し、その後各人の能力、適性にふさわしい訓練職種を決定し、効率の高い能力開発訓練が行なわれている」以上、訓練職種決定のいきさつはさておき、この能力開発訓練という言葉が印象的であったので、こゝに紹介した。

因みに同所長は、43年3月に欧州の職業訓練を視察して来られたものである。

T市A中学校

A中学校はT総訓から西へ約50km、総訓から最も遠隔範囲の中学校で、農村、漁村を控えてポツンと建っていた。

こゝの生徒の中には、山1つ越えた村からも通って来る者がいるという。

校長が不在中でと云い乍ら応待に出られたO先生は地元出身のスポーツマンタイプの活達な方。

「T総訓も良くなりましたね。うっかり推せんすると落とされますからねえ。」と明るく笑われた。

T総訓のW訓練課長は

「是非又今度も良い子供さんを頼みますよ。」と早速PRを忘れない。

私が拝見したのはT総訓にクラスから4人揃って入所したというBクラスだった。男子24名、女子17名の41名編成で、そのうち男子について知能検査による偏差値平均は51で、最高83から最低30と巾広い分散がみられた。

この中からT総訓に入所した者の知能偏差値は56、48、48、47で、中学校3年次の学科成績も56の生徒は5段階評価の4も交じえて平均3、その他の3名はいずれもオール

ると、それぞれクラスの中位どころを占めている。

担任の先生の所見欄には、この4人の生徒について、いずれも「努力型」と記入されていた。

T市K中学校

K中学校は、T総訓と隣接するK町にあり、近くに国立大学を控えた所謂学校町である。

N校長、M教頭、学年主任の先生方にお目にかかった。

T市内には、公立高校8校（普通2、工業2、商業2、農業2）があり、私立高校も4校（普通3、商業1）ある。その中でもN校、H校は大学入学率の高い名門高校とのことで、学年上位の者はまずこゝに向けるそうである。

T総訓へは、本人の希望も聞いたうえで、かなりの程度の者を推せんしているとのことであった。

拝見したFクラスは41名編成、そのうち男子は24名で、田研B式による知能偏差値平均は54、最高71、最低26と前記のA中学校Bクラスに比べると、平均においては若干高くなっている。

この中から、T総訓へは、知能偏差値52、46、46、というA、B、C、三君が入所した。

明るく、親切でまじめなA君の中学3年次の学業成績は平均3、まじめで努力家のB君も、2は交じるが平均3、しかしC君は、以前病気の為1年間療養生活を続けて学業は平均2とふるわない。再び病に倒れることなく、技能者として巣立って行くことを祈りたい。

N、O総訓を訪ねて

N総訓に着いた日は、折り悪く台風の前日、風と雨のかなり強い日でした。そうした中を訓練課長、庶務係長の出迎えを受け、少なからず恐縮しながら訓練所を訪ね、今回の調査の目的と表意を説明したのです。

目的についてはすでに本部からも、また訓大からも説明されていることでもありますので、ことあらためて説明の要はないものと思っていましたが、実際にはあまりよく理解されていなかったのではないかという印象を受けました。

もっとも、私たちテスターにも職適、田中B式、興味テストのもつそれぞれの性格やこれらの結びつき、その結果の利用については前もって説明されていたのですが、これが容易に理解しがたいものでありまして、まして文書による依頼だけでは十分に理解されうるものではないことはよくわかります。

私も、この調査のもつ意義について深くたづねられた場合、何んと説明したらよいのだろうと心配していたのですが、案の定、私のお会いした先生がたからはこの点についてつっこんだ質問がありました。いろいろ話をしているうちに、調査の意義についてはどの先生も実施の必要性をわかってもらうことは出来たのですが、三つの調査の関連や、結果の利用については一抹の疑問は残ったようでした。

そして、話の中から、先生がたは職適をはじめ各種の心理テストに大変興味をもっておられることを知りました。この総訓でも過去においては職適を入所試験に実施したこともあるということでしたし、近くの大学の心理研究室に協力を依頼したこともあるということでしたが、

残念なことに、それらの結果が生かしきれているかという点、必ずしも充分であるとはいえないようです。というのは、入所試験のみを対象としたものでしたらその場かぎりのものであってもよいのですが、理想としては、この結果がその後の訓練生の成長の手がかりとして生かされるべき性格のものである以上、何らかの形で整理されているはずのものであるのに、どのテストの結果も、数字に表われたものみの理解に終わっているようでした。というのも、データを生かす方法、たとえば統計的処理法を知ることにより一層生かされるものも随分あるように感じとれましたが、その多くは死蔵している状態のようでした。簡単にいいますと、興味をもつということと理解するということが一致していないという一面があるような気がしました。

さて、いよいよ翌日の朝からテストを実施したのですが、私はこのとき随分速いところに来たのだなという実感をつくづく味わされたのです。といいますのは、東京に近い訓練所の訓練生をみる機会の多い私にとって、ここで会った訓練生の素朴なことと雰囲気の違いに驚かざるをえなかったのです。

彼らは全く素朴です。その素朴さがそのまま態度になって表われているのですが、逆にいえば、素朴さを侵すものがないということがいえるでしょう。この場合、社会的刺激が少ないという一因のほか、訓練所に対する偏見というものの少ないことが一番大きな原因ではないだろうか考えると同時に、それとは全く逆に、訓練所というものが一般の目から遠くはなれた存在であるのではないのだろうか考えたのです。

都会地にみられる訓練生は、いまだ技能尊重の社会的基盤が確立されていないがゆえに、また進学グループからの谷間意識をもつがゆえに、いつもまわりの目を気にしているかのようですが、私の会った訓練生からは、素朴な中にもまことにのびのびとした生活を汲みとることができたのです。

もっとも短い滞在期間での観察でありますので、幾分の観察あやまりは事実あったのですが、この時点においては訓練所に対する偏見のなさが生み出したものであると考えていたのです。しかし、後日、近くの中学校を訪れる途中、住民の言葉から出た“補導所”という言葉の裏にある意味と、中学の教頭先生の話から受ける感じとでは、職業訓練所のもつ働きは、いまだ過去のものともあまりかわらないもののようなものでした。とすると、私の目にうつった彼らののびのびとした姿というものは一体何に起因しているのでしょうか。それが最後まで残った疑問です。

そして今一つ、風習の違いというものがありそれが無視することの出来ない精神的基盤になっているということです。短かい期間、その地にいた者にとりましては大いに異和感をもつものですが、地方の訓練所には大い地方出身の先生がその任にあたっておられますので、外来者の私がさして心配する必要はないのでしようが……。

マスメディアの発達や鉄道、飛行機等の発達により、表面的には時間的、精神的な距離感は著るしくせばめられてはいるのですが、数百年の歴史につちかわれてきた精神文化というものは一朝一夕にして失なわれるものではないということが彼らの態度の中に表われているのです。

その一つを例にあげますと、指導員の先生の指示はほぼ命令に近いひびきをもっている

ということです。そして、訓練生自身もこれに対してほとんど不満の気配を表わさないので。都会地にみられる先生と訓練生のあいだから、一面では友達つきあいのような雰囲気もみられますが、私のみた二つの総訓では、友達つきあいの中にも先生と訓練生という非常に厳しい一線がひかれているように感じとれたのです。そして、こうした関係が訓練生にもごく自然であり、先生にしてみても全くあたりまえのことをしているのだという感じにしかとれないのです。これの良し悪しとなると問題は別ですが、なまじっかの民主主義論や間違った民主主義論が横行している現在において、二つの訓練所でみた先生と訓練生の関係は非常に気持のスッキリしたものであるというのが私の感想です。

私の訪づれた二つの総訓の所在地には、これといった産業はみあたりません。某造船会社を近くにもつN総訓ですら修了生の60~70%を毎年県外に就職させているということですし、O総訓にしてもやはり60~70%の修了生を県外に就職させているということです。

日本の産業の全体からみれば、修了生がどの県のどの会社に就職しようが大勢には影響はないのですが、折角の訓練生でありますので出来るだけ県内就職のあっせんをする必要があるのではないかという気持が私の頭に残った問題です。

聞いてみますとO総訓の場合、県内就職者と県外就職者(主として関西、中京地方)には数千円の給与差があるとのことでした。そうであるとすれば、いくら地元産業の振興を願う関係者でも、理屈ではひきとめの必要性はわかっていても、現実の問題としてこれ以上強くひきと

めるわけにはいかないということでしょう。

その上、関係者の悩みは、県内就職者にしろ、県外就職者にしろ必要とされているのは彼らが訓練所で身につけた技能ではなくて、中卒という労働力であるということでした。二年にわたって一生懸命に訓練した自分の教え子をその程度にしか評価していないことについてある先生は真剣になって怒っておられました。訓練生自身にとっても我慢の出来ることではないはず。たしかに二年間の訓練で何ほどのことが出来るかということになれば、全面的に否定するわけにもいかないでしょうが、訓練生には二年間にわたって養われたプライドがあり、これを否定することは職業訓練の存在そのものを否定するに等しいものになるのです。したがって、折角就職しても仕事に身が入らなかつたり、転職をくりかえすことになったりしてしまうケースが多いのだそうです。

今回の調査ではいろいろな人にお会いし、いろいろなご意見を伺うことが出来ました。その中でとくに印象に残った話にこういうものがあります。

現在の職業訓練というものは、高校進学の間にいる者に与えている“教育”であるという意見です。教育ですから当然のことながら人間形成はもちろん、より高度な知識を与えるべきであるという意見です。いわゆる職業訓練の教育化という立場に立って話を進める人たちの理論です。

いま一つは、職業訓練所に来ている訓練生は学校教育にはもはやついていくことの出来ない者であり、こうした者に教育をしても効果はあがらないとする意見です。

したがって、後者の考え方を主体とじているというある訓練所では定時制高校への通学、通

信講座の受講についても一部制限を加えておりまして、訓練所における訓練方法も経験の積み重ね方を重視し、身をもって覚えさせているとのことでした。

さて、最後に一番印象に残ったことを一つだけ記して終わりにしたいと思います。

私たちは毎年、調査研究のために全国の訓練所を訪ねる機会がありますが、この場合、どの訓練所でも私たちを非常に丁重にもてなして下さいます。調査といえば準備万端ととのえて待っていて下さいますし、実験といえばあらゆる可能性を考慮した材料や器具をそろえて待っていて下さるといふ場合が多いのです。そして時によってはお世話になった上に食事をごちそうになることすらあるのです。

今回、私が担当したN・O総訓がやはりこのように気を使って下さったのです。お忙しい中から調査の助手として2～3名の先生をつけて下さいましたし、また、私事の用件にも気を使って下さるのです。若い私などはいつも穴があれば入りたいような気はづかしさを感じるのです。ところが、地方から上京されてくる指導員や訓練関係者の方々には、全くこうした配慮がなされていないのです。この点について、いつも申し訳なく思うのです。

以上、感想文であることをよいことに駄文を書きつらねましたが、こうしたことが書いておられるのも訓練所の先生がたが一生懸命お手伝いして下さいたからに他ありません。おそらく先生たちのお手伝いなくしては何一つ出来なかったのではないかという気がいたします。

最後にあらためてお礼申し上げて筆をおくことにいたします。

A 総合職業訓練所の感想

はじめての土地だったので、はっきりとはわからないが、県庁所在地駅から、さほど遠くないところに、A総合職業訓練所は建っていた、職業安定所などの官公庁とならんで位置している。

しかし、タクシーの運転手はかならずしも、目的の場所に直行してはくれなかった。

たまたま、この土地に不慣れな運転手だったのかもしれないが、2つの心細さが心のかたすみをよぎった。

地理的にえらいところにきたなという単純なものと、職業訓練はこれからどうなるのだろうという複雑なものとのである。

ともかく、目的地について、校庭にとびだし、朝礼に集まってくる訓練生をなんとなくくながめていた。

広い空間に、思っていたより、かなり小さい一かたまりの集合が体操の体型に散った。

あとで聞いた話ではあるが、訓練所への応募は低調なのだそうである。

一般的には、高校進学が増加がその大きな理由であろう。この地方には大きな工場といえば、造船所が1つあるだけで、土地の人々が工業に関心をあまりしめさないというのも、訓練所の低調な表面的な理由かもしれないとも考えてみた。

<朝 礼>

朝礼の内容で、こんなにも多くさんの事項がならべられたのを聞いたのは、はじめてだったが、晴れた日だったので私にとっては幸いだった。

朝礼のやり方はともかくとして、その内容に

は熱がこもっていた。

“教える側もいっしょうけんめいに考えているのだからまじめに作業にとりくんでほしい”と言う。段上の先生の声に、顔に、“なんとかしなければ……”という気持の一端をのぞくことができた。

さらに、朝礼は進んで、“服装のみだれている者や頭髮の伸びすぎているものがあるので十分に注意するように…”など、どこの訓練所でも聞かれる忠告があった。

日常的な態度を含む生活指導が、規律だけをやかましくいうHabit brakingにとどまっておき、訓練生の社会的要求をみたますべき、新しい方向を示した習慣の訓練(Habit Training)にはなっていないことをあらためて知らされた。もちろん、規律の指導が無意味だというのではなく、日常生活態度にも、かれら自身の心にもっている、すべてを生かしていける創造性の訓練が中核になるべきであるとも思ってみた。

<所長さんの話>

だいたい、所長さんの室というのは居ごちがわるいものときめているが、ここではめずらしくも落ち着いて話を聞くことができた。

新しく赴任された所長さんが訓練所のカラーに染っていなかったためかもしれない。

今までの経験からすると、おざなりの批判に終るのが会話の常であったので、その日は第1図のようなチャートを用意して、現状の訓練所における訓練の効率を下げている要因はなにか、その領域はどこにあるのかを教えていた。

第1は「環境の特性について」であった。

寒い冬をひかえて、実習場の暖房の設備が不十分で、

“オーバーを着て、厚い手袋をはめて、どうやって1/100の精度を測定し、旋盤をまわしたらよいのだろうか”

とおっしゃる。管理者としては、なんとか解決しなければならぬ大きい問題であろう。しかし、若い職業訓練研究屋にはどうすることもできない効率阻害要因なので、同情するより、なんのすべもなかった。

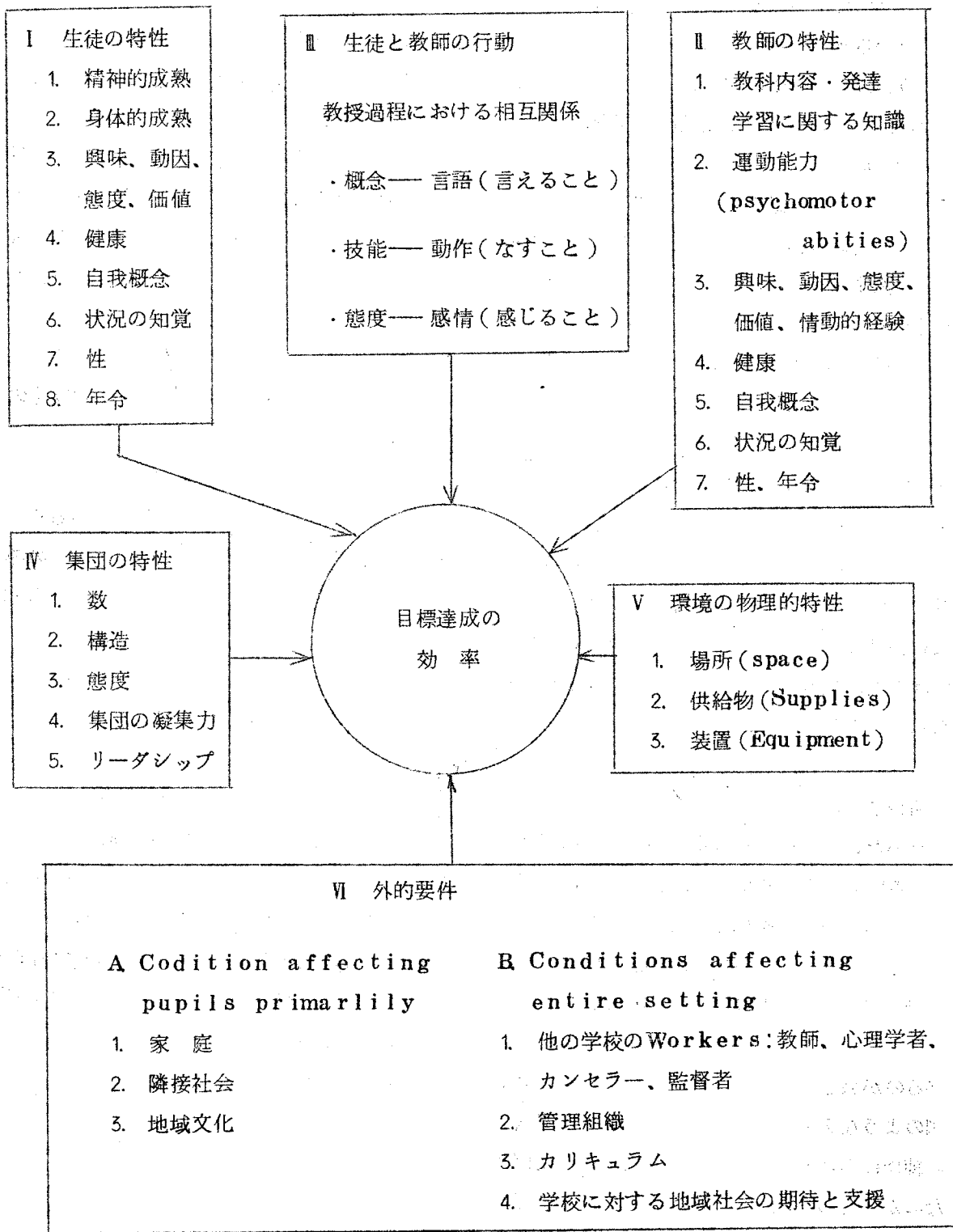
第2は、今回の出張の目的である「訓練生の素質」についてである。

所長さんの言葉では、“ともかく、ほかの訓練所の訓練生にくらべて、とても質がわるくてどうにもならない。社会科などの話でも、のみこみが悪くて、どれだけわかっているのかもわからない”とおっしゃる。

一般的には、訓練生の知的な水準は平均的に低くなっているのかもしれないが、“訓練生の質”という意味がいろいろあると感じた。

あまりにも、頭のよさ、知能的な質が重視されるあまりに、人間の持っている運動能力だとか、情緒的な能力が同じ価値にうけとれないのが今の世の中の一般的なのかもしれない。

もう一つ、知的水準が低いとか高いとか言う場合、どこに尺度(基準)をおいているかが問題になる。心理検査などと比較して、訓練生の姿をつかまえて、



訓練所における授業を効果的に行なうには、どの領域の問題を解決すればよいのか。

論じられることは、今までの職業訓練界ではなかった。

ゆえに、観察者の主観的な判断だけで、素質が悪いときめつけられることもありうる。

たとえば、自分の子供との比較における基準であったり、自分の過去の経験でこれくらいはわかったはずだ、などと想像でものをいう場合が、人間には多いものである。しかし、教育訓練における訓練客体を理解するには、客観的な理解が先行するべきであろう。また、訓練生のよい面はどこにあるのかを、みつけだす構えと努力が必要だと自己反省した。

こう言いながらも、はじめにも書いたように、職業訓練コースを選択するものが多くて、訓練を実施して、職業的成功をおさめる可能性のある者だけを入所させられる現状であれば、客観的な訓練生の理解という意味あいもかわって来るとも思っている。効率的な訓練のための大きな要因——訓練客体に問題なしとは言えないようである。

第3に、話題になったのは、“人格形成のための職業訓練”ということである。

ともかく、“仕事はさほどできなくても、頭がわるくても、人がらのよい人間になってほしい”とおっしゃる。人間として、知、情、意すべてがバランスされていれば、それにこしたことはないが、なかなかうまく創られてはいない。だから、どれかすぐれた面を伸ばして、その特徴で他の面をカバーしようというのが基本のお考えだったのだろうか。

たしかに、現代企業青少年に求めているものは具体的にすぐに役立つ能力ではあるまい。

変貌する産業社会に適應できる知的、情的な能力をもった人であろう。

だから、人格形成としての職業訓練という言葉もでてくるのだと思う。その意味はよくわかるが、“人がら”をカンバンにして訓練するとしても、具体的にどのように訓練するのだろうか。

やはり、それぞれの職種の具体的な仕事に心から打ちこんで、困難にぶつかり、その障害をのりこえていく過程で、人格形成がなされるのではないのだろうか。

＜入所試験について＞

前述したように、“頭がよいという人ばかりでなく、人がらのよい人を選ぼう”という基本的な考え方から、来年（44年度）からの入所試験に、“矢田部ゴルフオード性格検査”を使用することに決定したことを聞かされた。

その解釈について、するどく質問されたが、その場ではともかく、賛成の意を示めしたに過ぎなかった。

というのは、第1に、一般にいわれている“人がら”と心理検査という“性格”、“人格”という概念が、かならずしもぴたりしないからである。

第2に、“性格検査”だけやって、職業適性能力に関する検査を加えなかったら、やはり職業訓練の指導の過程では、不都合だろうと感じたからでもある。

しかし、心理検査を新しい基準におきかえるのは、やはり実際に訓練生の姿をみている指導員がするべきで、多少心理検査をかじった者が、とやかく批判するのもおかしいのかもしれない。

このような教えるものの積極的な構えが、これからの職業訓練を改善するであろうと思った。

最後に、機械、電気、自動車整備、木工と実

習場における「訓練生と指導員のコミュニケーションの相互関係」をみせていただいた。

訓練生の姿に、若さや、はつらつとしたエネルギーのほとばしりは感じられなかった。

数日の短い観察は、これからの職業訓練観に対して、自己の迷いをさらに増したのである。

<B総合職業訓練所>

刈りとられた稲の香りを感じながら、B総訓の前の橋を渡った。

第1学年だけで130名の多くが入所している。今回の素質調査では、その130名を3班に分けて、3日間にわたり知能、適性、興味の検査を実施させていただいた。

そのおかげをもって、訓練生との会話もできたし、こまかい観察を加えることも可能となった。

「機械と人間の本質的な差違はなんなのだろうか」とか「職業訓練を受けている人が、これからの世の中でどんな役割をになうのであろうか」などについて、訓練生と話し合いながら、目的の調査を進めることができたのはうれしかった。

この会話は表面的であったかもしれないが、訓練生との心のかよいあいにおいて、不自然さや消極的な態度は感じられなかった。

マトを得た答がかえってきて、意識されたかれらの職業観が、よい方向に形成されているのを喜んだ。

山間のこの地方では、かなり応募者も多く、一般に言われているように、知能水準が低くはないとその雰囲気を感じた。

応募する人の中には、変り種もあって、職業訓練大学校に合格できなかったのに、B総訓の自動車整備科に入所した例もあるそうである。

また、各科ごとの応募状況なども、京浜地域とはかなり異なり、機械科などはあまり優秀な者はあつまずらず、一般には知的レベルの低い者が集まりがちで、木工科に成績のよい者がくるといった現象もあるそうである。

その、はっきりした理由はわからないが、工場があまりないので、比較的大きな工場が地域内に新しくできると、そのほんの小さい産業構造の変化によっても影響されるらしいとも聞いた。

訓練修了者のほとんどが、県外に就職している現状の中で、両親のいる地元に残りたいという心が、このような傾向をまねいているのだろうとも推測してみた。

<教室の隅に山積みされた企業からの募集パンフレッド>

教室の片隅にある机の上に、2年生のためのものであろう。はるかに遠い東京・神奈川の各社の求人案内や会社概況がうづ高く積まれている。

この時期(10月)からして、ほとんど必要のなくなった資料であつたろうが、1年生の訓練生がばらばらとめくっていた。

その、かれらの表情の中に、「すこしくらいできなくたって、就職口はいくらでもあるんだから、心配することはない」といった気持ちがなんとなくあらわれているような気がした。

仕事ができなくても、本など読めなくても、訓練所さえあれば、賃金はもらえるのだから、まず心配ないという安心があつたとしたら、どうだろうか。

訓練所における学習の意欲は多少とも阻害されるのであるまいか。

職業生活の意義、職業価値感などに関する専

門的な訓練がこれらの訓練生には必要ではあるまいかとも思った。

<機械科のS君について>

この所の先生方は、この調査に対して、誠に積極的であり、各科の担任の先生が、適性検査の器具テストの実施に立合わせ、1人1人の訓練生を観察しておられた。

たまたま、機械科のS君が指先器用検査でその他の訓練生より、きわだって劣る粗点で14であった。(普通25)そこで、検査者である私が再度やってくれるようにたのみ、その信頼性を確かめた。(やはり、悪い点であった。)

その時は、別に話もなく、そのまま過ぎたが、テストが終って指導員室にもどってから、機械科1年担当のK先生から、“S君のとき、なぜ、2度やったのか。”と質問された。

はじめは、その質問の意味がわからなかったが、普段の実技訓練において、どうも成績不振で、職種の転換をも考えているほどで、指導方法としてなにかよい方針はないものだろうかということであった。その時は、適性検査の1つの検査の素質しかわからなかったの、なんとも答えられなかった。

今、ここにある各種の検査結果をみると次のごとくである。

職業適性検査

G V N Q S P A T F M

96 87 82 83 110 58 54 60 33 78

職業興味検査

<領域> 機械的できわめて興味が高い

<型> 技能的・計算的でやや普通よりよい

入所動機

- 先生に総訓をすゝめられた
- 中卒のまゝで就職するのは不安だった
- 就職するのに有利だと思った

家族

父母は健在、姉兄があり、兄は高等学校に行っている

かならずしも、この結果だけから、S君を予測することはできないが、知能は機械操作にはむいている。興味の方向も機械的なものである。

たゞ、器用さなど運動機能の発達がおくれているので、機械のスピードにおいつけないでケガでもしなければよいがと心配される程度である。

また、グループの中で、とびはなれて運動機能がおとるので、個別的な配慮をしないと、S君自身、つまらない劣等感に苦しんで、中途退所する危険もある。

具体的な指導は、一緒に訓練過程を観察してみないとわからないが、個別的な配慮があれば、技能習熟は他の訓練生よりはおそくとも、職業的成功の可能性はあると、私は解釈したと思っている。

その時にも話題にのぼったが、“頭のよい者は腕もよい。”という意見を固執される方があったが、“頭がわるくても、腕のよい。”のはいるし、“頭がよくても腕のわるい。”のもいる。それぞれ、独立的な能力してその訓練生を育成すべきではなからうか。

<朝の実習場にて>

テストのあった翌朝、実習場を1人であるいてみた。

機械科の実習場で、みたことのある顔があい

さつした。現在、製作中のテストピースをみせてくれた。ちょうど、2年生と同じ課題の段付き丸棒切削をやっており、「やはり、2年生とはどっかちがう。」と素直に話してくれた。バイトは1人1組ずつ、持っているということで、うらやましくも思った。

木工の実習場では、母親から頼まれたのであろうか、菜ばしを熱心に削っているものがあった。

朝礼のはじまるほんの直前の実習場は想像以上に「明るさ」がみなぎっていた。

<訓練生の出身中学校をたずねて>

就職者の多い中学校と進学者の多い中学校の2校を選んだ結果となった。

前者は市内から、バスで40分ぐらいの山の中にあった。後者は市内の中学校である。

後者は、ちょうど文化祭の準備とぶつかり、ゆっくり先生の話聞くことはできなかった。

前者では、職業指導主事であり、訓練生F君の3年次の担任でもあった50才ぐらいの男の先生と長いこと話すことができた。

その要点はつぎのごとくであった。

第1に、中学校と職業訓練所との連絡がまったくと言ってよいほどおこなわれていないこと。

職業訓練所のポスターが中学校の玄関にはってあったが、中学校のその先生はそれを知らなかった。さらに、1年生に入所している訓練生が母校の中学校の後輩を非行化の方向に導いて仕方ないのだそうであるが、訓練所と協力して、その問題を解決しようとしていないなどの事実があった。

第2に、職業訓練所にやっても、その成果が安心して期待できないということ。

2年間の教育訓練を受けさせて、子供の将来

を考えた場合、それだけのよいことがあるのかどうか、はっきりとわからないとおっしゃる。

それでも、前述のように応募者は多い。その理由の一つは、男子の場合、普通科の高校をおちると、農業高校にいかねばならない。そこで、総訓に行くという傾向なのだそうである。

第3に、職業訓練が高卒中心、成人中心に変わりつつあると新聞でみたが、就職者の多い中学校としては、人格形成を中心とした高校程度の教育機関として、職業訓練所に期待したいこと。

以上のようなことが聞かされた内容であった。職業訓練はかわりつつある。その変化を中学校へ知らせていくのも職業訓練所の役割ではなからうか。